

払っている税金の一部が、損失穴埋めに使われたことへの謝罪もない。そもそも公共団体が銀行経営をすることについて、当初多くの人が反対したにもかかわらず、本人が無理やり実行に移した責任がある。東京オリンピック招致でも、金ばかりつぎ込んで、都民や国民への説明をなぞざりにしたことが、敗因の一つである。謝罪のことは一つとしてない。その一方で、汚い言葉で他人を罵倒する。芥川賞作家の言葉とは到底思えない。麗澤談話に大変不愉快な思いになったところでテレビを消した。真つ先に批判の矛先を向けたのは、官僚制度である。いわく、「中央官僚の一番の欠点は発想力がないこと。だから、問題を全部棚上げにして先送りする。地方がそれでどれだけ割を食ってきたか。そういう通弊を私たちは変えなくてはならない。」

具体例として、日本の会計制度が軍式簿記で複式ではないこと（おそらく財務省や年金を預かる厚生労働省への批判か）、文部科学省のゆとり教育批判、厚生労働省の保育所政策批判、外務省の横

田基地批判と延々と続いていくのである。さらに官僚批判は続く。「首都の行政を預かり、国家との摩擦の中で感じてきたのは、この国を現実的に牛耳っている中央官僚の独善。彼らは、自分たちの特性を「継続性」と「一貫性」と言うが、この変化の激しい時代に、継続性と一貫性にこだわって何ができますか。国自身の善意で解決してもらいたい大きな矛盾をいくつか抱えている。最たるものは、占領軍が一方的に与えた、あの醜い日本語でつづられた憲法だ。」と、いつの間にか憲法問題にすり変わっていく。官僚を使いこなせない民主党、さらにこれはこれまでの自民党を批判するどころか、官僚制度そのものを批判するといふのは、筋違いだろう。私は今の官僚制度に問題がないとは全く思っているわけではないが、ここまで理由なく汚く罵られる理由はないと考えている。

官僚は、これまでの慣行、慣例、継続性にこだわって自ら考えようとしないうが、それが官僚制度の本質である。これまでの行政の継続性を考えつつ、過去の経緯を説明する、これが官僚のもつ

とても重要な役割だ。官僚からの情報を踏まえてどう処理するかが政治家の役目だろう。この点の認識不足はあまりにも稚拙と言われている仕方がない。

そもそも自分は東京都という官僚組織のトップにいたのだから、東京都の官僚組織をどのように変えたのか、具体的に話をすべきだ。週に二、三日しか都庁に顔を出さず、官僚に任せっきりだったに顔を出さず、官僚に任せっきりだったとも言われている。

安住民主党幹事長代理がテレビで発言していたが、東京都の職員の天下りは全く制限がなく、年々拡大しているそうだ。東京都の官僚組織が、国の組織よりどのように優れているのだろうか。

それよりも何より重要なことは、自ら地方をどう変えようとしているのか、道州制とは何なのか、その場合東京や大阪はどうなるのか、われわれの知りたい具

異で、野合が大儀だ、という感覚こそ全くの時代感覚のなさを物語っている。そもそも官僚制度を敵とみなして、倒幕とか薩長連盟とか、人の心をつかむキャッチフレーズとは思えない。

尖閣問題は、自分が火をつけておいて、その反省は全くない。日中経済問題をどのように考えているのだろうか。新銀行東京についても、われわれが東京都に

十月二十五日に行われた石原慎太郎東京都知事の新党立ち上げ記者会見を聞いていて、名残がたい感覚に襲われた。デジャヴ（既視感）のような感覚で、時代錯か薩長連盟とか、人の心をつかむキャッチフレーズとは思えない。

尖閣問題は、自分が火をつけておいて、その反省は全くない。日中経済問題をどのように考えているのだろうか。新銀行東京についても、われわれが東京都に

不易と流石 石原新党に思う

石原 茂樹

モリのぶ しげき

法学博士。1978年京都大学法学部卒業後大蔵省入省、主税局総務課長、大阪大学教授、東京大学客員教授、東京税関長、2004年フロンティア大学で教鞭をとり、2005年財務省財務総合政策研究所長、2006年9月から中央大学法科大学院教授。東京財団上席研究員。著書に、『消費税、常職のウソ』（朝日新聞）、『日本の税制 どこが問題か』（岩波書店）、『日本が生まれ変わる税制改革』（中公新書）、『日本の税制』（PHP新書）、『給付つき税額控除 日本型児童税額控除の提言』（中央経済社）等。

